

あらすじ

語り手 大原寿美子
さん(明治40年生まれ)
昭和62年8月23日収録

昔、ひき蛙ひきずまがやってきて「ええ天気になった」と思っていたら、山の猿が下りてきて、「久しぶりで会ったじゃええ、めおい(費用をお互いに出し合って飲食すること)をしよう」。

猿が臼うすと尾根の頭へ

猿とひき蛙のめおい餅

(八頭郡智頭町波多)



イラスト・福本隆男

猿の顔と尻が赤い理由

う。ひき蛙は「そぎゃし
よう」と言った。
そうして尾根のてっぺ
んから、谷へころころっ
と転ばす。猿は「待て待
て」と下まで転んで出た
後で上がったところ、猿
が「ここから転ばし、下
で食べよう」と見たら、
中へ落として食おう」と
言は空っぽだった。

猿が山の途中まで引き
返してみたら、そこにひ
き蛙がいる。ひき蛙は、
猿が臼をほんのちよっと
とる。熱い餅をほっぽ
うほう」と言いながら食
べているそう。

猿はうらやましくてな
らないから「こっちい流
れよる」とひき蛙に言い
聞かせるけれど、ひき蛙
はそれにはおかまいなく
一人、流れる方から食べ
ていた。

実はきめの細かさがつ
かがえる語りである。関
敬吾博士の『日本昔話大
成』から戸籍を探ってみ
ると、動物昔話の「動物
競争」の中に「猿蟹餅競
しよし」と言っていて、中
の争いとして存在している。
つまり、猿が主人公、
蟹が副主人公となっている
ことが多くようだが、
猿が熱うてかなわない
ものだから「あつあつ」
と言いながら、みなじぎ
りに藁わらがその役を引き受
けに食べてしまって、今度
は「もちい」とでええけ
の語りは、副主人公が藁
「よしよし」と言った。
猿の方はまた中の熱いと
ころを、顔へぶつけられ
たらかなわないと思っ

解説

「餅米もちこめをもつこうてる」ところ升ほど担いで来たので、ひき蛙はそれをい
で、セイロウ(蒸籠)に
入れて蒸して、臼に入れ
てころころとしたら猿が
「こっちは、おもしろ
うない。尾根が上がって食
おう」と言っていること
になった。